

ちょっと ブレイクしませんか?

塩を運ぶ驢馬(ろば)

第 8 回

イソップ物語に「塩を運ぶ驢馬(ろば)」という小話がある……塩を山のように担がされた驢馬(ろば)が川を渡っていた。足を滑らせ、水にはまったら、塩が溶け出して、身軽になって立ち上がった。これは嬉しかったが、その後、海綿を担がされて川にさしかかった時のこと、また水にはまったなら、荷を軽くして起き上がるだろうと考えた。そこで、わざと足を滑らせたが、その結果は、海綿が水を吸い込んだため、立ち上がることもできず、その場で溺れてしまったのだ。

映画「アイリスへの手紙」(1990年 米国)は、恥も外聞も捨てて、自らの弱点を克服する地味な作品だ。夫に先立たれたアイリス(ジェーン・フォンダ)は、パン工場に勤めながら、二人の子供、それに妹のシャロンと、その夫で失業中のジョーまで養っていた。貧困にあえぐ家の中は暗い雰囲気満ちていた。ある日アイリスは、工場からの帰り道に泥棒に給料を奪われるが、その時彼女を助けようとしてくれた工場のコック、スタンリー(デ・ニーロ)と知りあい、次第に親しくなっていく。ある日、スタンリーは、文字が読めないことが発覚し、それが原因で解雇され無収入となってしまう。スタンリーは、やむなく年老いた父を老人ホームへ入れるが、数週間後、父は帰らぬ人となった。ある日アイリスは、父の死で自責の念にさいなまれるスタンリーから、字を教えてほしいと頼まれる。しかし、地図を片手に標識を頼りに目的地に向かうという野外学習に失敗したスタンリーは、字を覚えることを諦めようとする。心を痛めたアイリスは彼の家を訪ねると、そこには彼の発明品があった。彼女はスタンリーの才能をほめるのだ。その一言で彼は再び勉強への意欲を取り戻す。やがてスタンリーが読み書きを自由にできるようになった時、ふたりは愛によって結ばれるのだった。



欠点や苦手なことを隠そうとするのは人の常。才能に恵まれた人は、努力を怠り思わぬ落とし穴に陥ることもある。事業仕分けで追いつめられる天下りは、「塩を運ぶ驢馬(ろば)」の逸話に一脈通じるものがある。浅知恵の驢馬(ろば)とは正反対に、映画「アイリスへの手紙」は、誠実に生きることの素晴らしさを教えている。貴方は、ストレスに果敢に挑戦しますか? それとも巧みに回避しますか?

精神科医・映画評論家

かゆ かや ゆう へい
粥川 裕平

国立大学法人名古屋工業大学
保健センター長
大学院産業戦略工学専攻教授

